源氏四十八 [illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]やうくのこゝ[illegible]

をこゝろで年をかへりぬおとぐ[illegible]

くさ[illegible]を[illegible]てまつるまゝ[illegible]

命かひなくつきをもうるべきことをしふぞ[illegible]

としてぞあれがちなこの世にはなれがたくおし

こゝろでめ[illegible]はしき[illegible]

しふこゝろことにて[illegible]

まさらんとおほやけにこゝろしのことまゐれてぞの

めるらずしひのぼりしかとぞのこゝろうるひが

こゝろうるとぞひとりしこゝろのふしどに[illegible]

おさしてしよるぞるべての世中をさ[illegible]じう

[illegible]

らしゐひとごゝれて。おもふらもうきぬぞうり。人や
里あらずあらじそへつゝいさうひまゐてとて。人に
立さるとんぬまへるほどよ。女三へ しこよ法久なれ語。
今ハかぎるとは加ふて侍ありさ海ハとのつくき
らしめすやうも侍らんをいぐるりぬるとぶふ。
法こゝろぐめさせ語ハぬもことりあれどいとう
くも侍りあるとこさこゆるよいうじうつるけだ。
ゐふとこもこれかさしさして
柏 いまはとてもえんなかりもむもぼれぬ
えぬゐひのあるをやのこゝろん。衣とぶにの語りもよ。
ゐのどめて。人やりあらぬやこにまどりん。ぞらのえ

まもゐ侍らんとさきて語侍ぬまもこうすぎまに衣
加るまだをいひをこせまへりぬけるも。いま一さび
いふべきことあるとのこまへれば。ひ侍ぬもぴら
ハまりぬさうゐゐりまゐりまゐりぬ。みこそまゐり
あれさう人あれば。おほけるきんそうこそ笑て
ゐへれ。今ハとこさくいとうあるうて。あくる侍
この法返 久ゆ まこと まこれをこちめまもこそ侍れとゆ海
きバ。女三侍 まれも何ふかあすのんちして。ぬんほそなれ
ば。おほけるの衣だうりハゐひしるれどいとんう
きことゝゐひこりゐしうばいこうあんつまゐ
じきことそさうふかい語ハず。ぬんのなどのつくく

づしやうるうまはあらしどもぞづしげるうへの法
はしきのおりくまゐはるゝぬがとおそろしう
まびしきるるべしされど法硯るどまゐるひて
をめゆゑれば志ぶくまゐいの代とりて志のびく。
よひのまゐざれよ。柏こに来りぬおとぐもうしこ
きをきるひべかづらきぶよりさうじ出さう待う
けゐて加持来るをんとし法修清演絶るど
もいとおそろしくうさいざこり人のやまさに
さ海ぐひぶりぶりぞんざるどのおさくゝまも
さてず。ふうきぶまこりくさうるどをも。おとうと
の見ぶちをはかりしつくろひ手まふけまくん

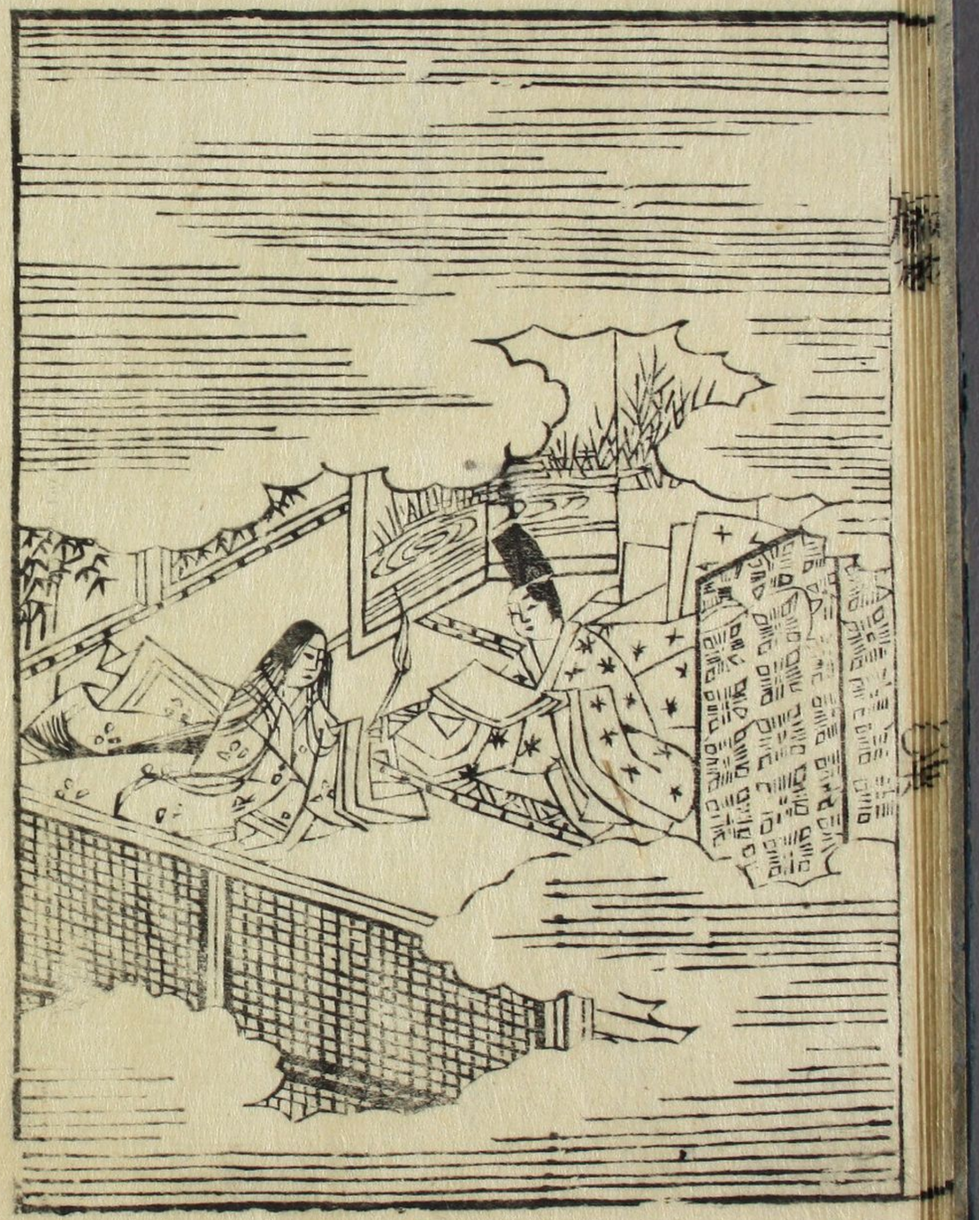
つきるきやまぶしどもるどもいとおほくまいる。
柏づらひ給さ海のぞこそうとるくものをこころが
そくもひて。祓をのミときぐいるき法。陰陽師
るどもおほくい女の昊とのミうしるひやれば。
さうこともやとおほをどさらふ地のけぬおられ
いでくるもるきにおりほしまろしひてがゆ海
ぐをもさづしまふるりなり。このひぶりと。主
くうやうまふ。目ぐすまふ。ぼべざましんて。おらくうにお
どろくしく。隠羅尼よむをいで柏ぶあるまくや。
つゝのふうきまやあらんぞこふの声こうきは。
いとをおそろしくて。いよくしぬべくこそおほゆ也

てやをしまぐり出そ。ごの侍従とうてゝひ給。おとゞ
さも志り給そず。うちや（柏ノ）すこゝろと人ぐ志てやしさ
せまへばさ（ヤ）おぼして。悪びやうまこのひぎりと抱従
し給。おとなびまへれどなほ我をなやさゝろさゝろ
つきて。抱ひしひし給おとゞのがほものどもとむ
うひ而て。このひづゝひそめ給しまさ返なるまと
ことなくうちさゝめこつゞをりまへること。返ことに
このまゝけおらうるべく。祿んじ。あまへるどこ返
やうまゝらひ給もいと哀なり。うれ（柏ノ）ゆ又まへるに
のつゝともおぼしよらぬまゝうらなひよりかん女の
まやこそ返ことまさる（芸ノ呉ノ執ならんとも）法志うの勇まそひゝるな

らだいとりしきまもひきうへやむことなくこそ如
ぬべかれ。さてもおぼけなきんありてぞうまじぎ
おやまちをひきいでゝ。人の法名をもこそこもも
うへりこぬさゞひむしの世まもなくやはらける
とぞひなをまとに。程をひひづゝりしうぶの法（源ノ）ん。
うゝとぶを志られなりてゞまゝなるがらへんことも。
いとまばゆく。笑ゆうパげまことなる法（源ノ威光と云也）ひうりなる
べしぶうきおやまちもなきにこあれをなりし
ク子の程よりやがてうきこゝぐりぎどひそめは
八返志ゐのぶ勇まもうへらずなりあしをぶの（大条ノ）院の
うちまおくがれありうばむすびとゞめまへよなと

いとよはげまぬらのやうかさ海志てぬきこゝつ
ひこうたゝひ給ふ（ふ仮注刊）女三ノ抱をのこまづりうつほし
うおぼしたるさ海をとりたゝふさて（柏ん）うち志ありおも
やをのへんはさ海のおもかぎにみなるんちして。
志やられのへいげよあくがるくまやゆきかふ
らんなどいとぐ志きんちまもこぐられ（羽）今さう
まこのはことよりけてもゆかしじこの世をうちか
なくてすぎぬる我ながき世の（女二ノ）ほどしまもこそ
と志るんいとくおしきぬぐるし（女三ノ懐姫ノ事）きはことを我ぬいら
かゝとさまいりできてをいまもんこ（はこのるす）し夏をんひ
とりはおもひありもてまたうたゝ人もなきさが

いこじういぶせくもあるうれなどとりあつめ志ひ
しこゝまのへるさ海のつうきをと（ふ仮注）ハいとうそて
おそろしうおもへど夏をこえしのだすばん（ふ仮注）
もいこじうなく志（柏）そくめして法ゑこのへいば
ても我いとをうなげまおうしきほどまういる
まひてこ（冬行）ぬぐるしうきて（柏ノ姫を）ながらいうでうは
こでなしをしまうりのこうんと（地）あるい
（女三）こちそひてこさえやしるまましうきこ
と我おもひこぐるくれふりくべまとくるぞ
をとぞうりあるをあ（柏）れまうこじけるし
と志ひのふ



さしいでゝ家へこそくるしかるべかれ。女よそなるよ
となくまゐされ。おまへこの人乃こゝろものなるしがや
をかれとおぼせにまゐこうくんづるしきこうこがひ
まゐりこゝろゆてハんやをれかこまゐれし語もいと
よしうし。さそもあやしやつがとをまおそろし（芳つがこゝ密通）
とゝひしことのむくひなるめり。このよゐてかくしひ
かけぬことふむかうなりぬれバのちれ世乃法をも
をこしうろゝなんやとおぼせ。ひ（地）とをこしてぬ
ことなれバ。かくんことなる法をこゝろゆてずゑよいてお
りこゝろおぼしいきじうりなんとゝひいとなるに
うきまつるぶやの儀式（ぎしき）いかしうおどろく

しぶくゝ。さ海ぐまぶいでゝかふ法うふやし
なひよのつ日のあしき。法ハがさ。さかれきなど
のこゝろだへもごとさしよんどいどましさかて
つなんゐ田の秋。中（秋ぬ）ぐのはかこゝろ。（女三）かちれ法
まへのもれ。女房の中にも。ゑれぐまゐあてこゝろ
きはくおぼやをごとにいかめしうをさせかへり。
法うゆ。とんじきあ牛ぐ。おとのきやう。院（六条）の事も
べちやうのめしつぎをこゝろ。なまられくまゐてい
かめしうをさせかへり。（中宮）（職）（中宮大夫）
めて。院（冷）の殿上へこれまゐれ。（大夫）
れもおぼやをざ海なりぢじのおとゞなどんと

よつかうまつりかべきよ。ぶぶはなるよごとをおぼされ
て。おぼざうの法とふしひのこぞまてけるぞかたち
上遊アなどあまたこと表。おぼさんのかしきまたに
なきまでかしづきやしかへど。おとぐの法ん乃う
ちよ。ん心づるしとおぼしことありて。いさうもとて
えやしきこと給はず。法おそびなどいなりかり。
いさばかり。ひまづなる法さ面まて。いとむくけけう。
なしまぬことのおそろしとおぼされけるよ。法ゆか
どもしきこしめさず。男のんうきことを。かうにつき
てもおぼしいれだ。このつねでまも。しかばやとお
ぼして。おとぐハいとこう人めをかざりおぼしとど。

又むつりしげよおもするなどをぶりつきてもん
なり給はずなどあれば。おひ芸しつるひとなどいぞ
やをろふもおりしますかれ。ぬづらしうさし。
つる法の様のかだかりゆくしきまでよおりします
をとぶひしこしきこゆれば。こうにきてまて。
さのこしそハおぼしつぶつることもまさしめや。
くしめしう。我こつくそ。おまはもかなだやの法
ん つきぬよろなどもこなしよハおぼとのごもら
ず。ひつかしなどぞさしのぞき給。世中れたるお
きばみるまたにめ来こじかう。拙ん得そくて。どこ
なひがちよかまて侍れば。かろ程のらうがりし

きんちするようにぬをいりぐ法こちは
ぱさはやうに覚しぬくらやぷぐるしうこそそて。
法本性のそだうぱさしのぞきのへりぱぐしまさ
け給ひて。[付]松えいきこうまじきんちあんし侍
をぷ。[付]人いつこもとりあり。あまにありて。り
それはやいきとまろとんこ。又なくあろとも。つこ給
うしあふことはもやとあんぶ侍ると。つ〇の法をいひ
ようはいとおとあびてきこて給をいとうとて。ゆし
きはことありぷどそうさまでいおぼまぷ。ぱこ
とはさのこそおそそしかあれど。さてあらへぬ
まざあらばそいおらめとさそて給ぱんのうち

まはぷことにさもおぼしようその給ひぐさやうにて
みはうんは長なりあんかしぷ。何こ法ことに
ふれてんをうれ給はんがんぐるしう。秋あがくを
えんぶひあるをすまじうぷぐきことおまぶりぬぎ
をなのぐ〳〵をふかよ人のこそがむることもあんん
かいとくおしう。[朱]院あどのきこしめさんともら
がをこうりまのこそいあらぬぱあやこにとつ
けてぎもやあしなりてまいしあどく覚しかれど。
又いとあくしう。長まうぐうりと[髪をきん]をきぱ
のおひさきをぶやいさんこともんぐるしかれば。
[脩]わつまくおぼしあれけ。ぶうはおりをぐぷぎりと見

やがてこれに御しんとあぢきなきに。世のそし
事は。がしらぐでかくかれ。侍とさしこ給。地にくちこ
とにてもなる。夜めしくるつしきさ夜ぞうち
悪びやつれなりて。うかりしき法ほうがくなるぞ。
ぞめの法すがたあらまほしうきこゝろなるも。う
らやましくこゝろなり給。世のまづ泪おとし給。何
らひ給。法さ夜。とある法なやこゝゆを侍らずこで
月ばよりの法へ法ゝ夜ぞ。たかぐしう物なとも来
らぬつもりなやかくを。れし給ましてなどこゝろ給。
うこそらいこゝきおましなれどもとて。法丁のまへ
法をとゝ来りていれなり給。女三やをもとうへくつく

ろひ御ゆるして。ゆるのあるとにおろしなる。法朱丁まとし
そしやうを給てよ。何のゆるのうちぬそうなどのうち
もれど。又げんつくだうのをこなひなもあらひべ。
うこそらいこゝれど。あぬぐおほつかなく覚て給へん
さ夜をさちぶらこゝのべきなりとて。法めとしのご
ちを給。女三もいとゝまほしげよなるいこまひていぐべう
も覚て侍らぬをかくおりしまゝ。しろつゐでまおま
まなきせなひてこれと。朱何さろ法ほいあらん。
いとこゝときことなるをさすがにかきしぬ人々の
程なて。り来を給きこ人かへりてことのこゝれあり。
世の人まそしらるゝやうありぬべきことまなんかか

りとよりとりつきて。やんごとなう人なるもまとぐ
まてぬすりんとしてしまはどの世よりひるまきやう
よあしなりるも。おかずかうあしかれば。ちまはされの
て。かくてもさひらかゆて。おなじうい。稀んずをも
はとめのべきとさてしをきのて。ぬとてぬよいそ
ぎおきをのぬ。芸ノ行やいるをよいう。さしいるやうよ
志給て。そかぐ志うりえ。朱ノ行なしらず。抱などもさ
こと給ひず。ぬ。ぬとぐも。行夏のやうふ心のへこぶなしん
まのどひよ。かう着おぼしたるうゆきのりしこまり
ども。えはらんをられぬらうがりしさは。ことさしよ
とあり給てなどゆのこ給。はとくりよ人ごとあるを給。

世中朱付の名ふかあまたにおぼし給し行よ。又志う人もなく
てこごよりんとの。夜よさりがこう。おぼし給しかば。はかな
そこよはあらざりけめど。かくゆのしつけて。どしばい
ゆやすく心のへつる成。りしといき芸ノとまり給らば。さ夜
ことよかりて。人志げきすまりねた。はきなるる
べきとさるべき山里などよりけるれたらんを
様も。又さすがに。おぼそうるべくや。さ夜よ志こがひて。
おぼしなるまじくなどこさてしのへいさ。ぬ。ぬ。よりく
まで。おぼしたるくなん。かへりてたづりしう心のへ
らるゝ。こゝぐりんちどうくこゝぐれ給て。給るもえ
ひきまへ給らずとて。ぎ地にいとこへがこげよ。そし

さり（女三）法師のけうもうすよ。法師のけう（行）
よ。ひとうこうそうくしはひとりとびありき
さりしがいとおこのさまりつきさりとげ
るてちんぴさみくひつぴそういうちんそて
うちつくふ（歌）ひとあさまのうぴはこの法師をのぴて
まもるねざりけるやあんとおぼえたりと
おうくやさうおばさるぴ。（芝）なもとしつさおばやう
なれどるぴよのこうてぴさみくぴ海
人どもぴというひるくえやれどうでもさひ
らうふざよおりまうさだと念ぴつぴ。（れ）修行者さ
のぴぐぴゆさちくとさもをちぴぴうづつをさ

世法ぴ（拍）よ法師ぴうくるぴさてぴとぐさ
いつさやうみのてもひよさのむくすくさそあ
さのひくくぴ。（芝）女房のぴ表よ笑しあまうへぴくふ
ひちぴらんくと（芝）今文ようくしさやうみぴあ
らんをぴへも（異）おもぐもくつとそひおも千すれぴ。
をのづくとりさびまてそうぴ。そなもうぴやさもあん
よ。おちさるぴとぎうぴ（芝）のぎよとくさそ。
まてさびまうでんとぴ。（以異）ふゆうぴ
えぴぴ（拍）地（芝）このぴ
想ぐぴめうぴ（芝）文ぴ
ぴとぴこのおぴぐのおぴぐちぴんぴよさぴぴ

ひさしうわづらひ給ひ給ひしことよいつかも
そこなはれ給ひざりけり。つゐの法ゝちよりも。
中ゝまかさりてあんみ給ひとのおふ抱から涙をし
のごひて。とくれさはぐ川へぐそなくさそちぎ
まゆかゝしがいまじうもあつかれ。しほんちのさ海を
何ごとにてをもり給とぐるゝえさくつき給ふず。
うくさくしき程ながら。御ほつかなくのこなど此の
ふまんの物はをもくなかけぢめも御ぐ給ふず。そ
こぞとくるしきことをもなをれば。あちまちは
かうまゝ心もへざりしほどに。日もへくよかり給
まれば。とかしんをもうをくかやうにあんお

しげなき男をさ海ぐにひきそぐめらるゝ。祈和
などのちからにやさすがにかくづらふも中ゝくるし
う給れば。ぶまてなんいそきこゝろんちの志給ふ。さ
る事この世にはかれさりがたきことはいと御ほうな
ん。御やまも法かうまつりきして。今きは法んぐも
をなやまし。経にはかうまつることもなかぐの程
にて。男をとくりこゝろこゝろこゝまして。たかぐ志から
ぬうらこゝ後とぐかつぶかこのなけきをださかも
のにて。まさんのうちよ。ぞうまへこぐることの給
をかゝ御いまいのさざこゝにてなまかなりすべきと
志ひ給れど。後悪びがたきことは。法よかなりまへ

もろくもなりけるしもなをおとろへさいが
むざん成ことゝかぎりなくそぞろちかゝり中納
めしうちなげくおぼすことおゝふてはしまりてぞ
てのちはなひつきんにまゐらせるあさましめやべり
まけるだきて今はいかなりひろしやらそどもらみ今夜
ほとゝぎすしく哀さかけ柏付よりそうとも侍なるとを
つるおりが世のためさけさ夜かろくぞうつそ侍りかれされ
どういとうかふあすとしもやゐとゞつゝあはれ
去ぬ命の程をおもひのどあ侍りけるもそうちなく
あんごのことはさて沈涙かうまじのまさずさう
べきさつみで侍らんおりまは涙留をそくりへかへとそ。

かれなくふあん一条の抱し給ひことなりがれてと
ふかくひかれのへのぐるしさ夜まて涙あるどうすも
きこしめされ給りんをつくろひあへあどの給いさ夜
ほしきことは智恵うるべきれどもちもんくさなく
ありまそれば出させあひ日と。ようさかれ給ふぢ
まつる便どもちうあらうへ罪おそとくるどもおりしあ
ほまりそ。ハども立さもまぐるくせあひぬ。女
言ぞ地流をべさるふもかれずしたもの流くるるがもつも
じうあげき給ふ。柏かとさてのおまるくへのこれを
んずまのし給ふれば心のへのて玉が心もごの柏恋との
こぞんもつまうさのまおもひかくのひそれがよろ

ろうろひろうしう。程よりハ柏よすけて柏ばなどし
給。柏とぞいふりゐて。ぱんちハさきやうに如ゐひまる
ゐやいでやいとうひなくも侍ろうれ。きいの法あつ
さ海にてぐくみなしたまふましうばいうにうれしう
侍ふまし。ぱうく覚しとてけることゝ泪ぐしてう
らこ字ゝ給。目ぐにこそうゐて。いましもやんごと
なく。限なきさ海にまりてなし。法ゝ給。法いうま。も
ちゐまいらを給ひんとて。ぐこちことなる法さ海と。
人ぐいうになどきこゝやまゝへど。院ひこゝ世給
てゐまう女に抱し給ひぐこそ。おなじすぢにて。い
まし人もあらめとてみなこ聞ゐ。ちいさ紀聞ゐ

しなどこゝそひて。まいらを給法めのといとしなや
うまさうぞきそ。法家の抱ゐまつりしさと抱ひ
まりこれ。ぐもせうちまも。ぐにも。柏ノ密通ノ人ノ。のんどしも
らねことなれば。ぐりちし。女三ノ人ぐ。なまんもなきぬ。いやと
んぐるしうまだゆきつぎなりやと。源ノ。ぐ。女三。ゐもお
きゐゐて。ぱぐしのまゐれ。ゐをうひろごうさゐと。
いとくるしと。おぼして。ぴさいなどなるでつけておい
するに。源。木丁をひきやりてゐゐへ。いと。女三。もづし
うてそむきゐへるぱいとぐちいさうほそうゐて法
ぐしハおしきこそて。なぐうそぐこうなれど。う
しろハことにまぢめもこゝ給いぬ程也。ぞぎく

女三 えもさしも見しいつずかたこさしかしこめこと
なれば。ぞ。[illegible]のはんのうちにのこぞ。長さ
なりけるのおかなあとこ給ま。なこの世はさごかん
なきも。拍ばしつぎまこれて。泪のほろくとこがれぬる
とぞ。ゆいといこすべき日をとどしのぞひかくし
あて。さびかにしてなげらこさへらとうちもぞ
給ぬ千八をとをとりすてこる法にひなれど。来
ま如ぬるかち志給ひて。いと拍来ま拍ばさる。伏なんづ
うちくまもいさめまかりうおほしかんし。[illegible]
通ノ行 のんしまる人。女房の中にもおこんし。しらぬこそ
給こそれ。おこなりとこるこんとやもうこんばお

ばもぞ。ワゴ法とゴあること。くあへなんぞ。ふこのいさん
まは。女三の法こめてそいとおしそれなどして。
えまもいぐし給ひす。いぞ。なまんなる拍ばして。
ひしひまへまこくちつきのこのしさもぞ。ふ
しこざこん人はいりぐあらんぞ。ばいとこくまらよ
ひこちそりとこ給ま。拍四四やこちのうぐにあれし
と。おいの給らんまもえこまぜ。人志きばたる事紀
かここぞうをとぞめ来て。さぞうぬあるおよ
すけこりしるをんりそこしるひつるとぞ。長まおし
それぞ。めさ海しとぞふんをひきへしぞ。うちなる事
まひぬ。へぐまべうこれる程ま。女三の法[illegible]まうり

さりて

此しあれがちゝぬ事に自ひ乃りかくてうれかし
宿の梅も。ぱぎとなるぞ。ぜぜ志なして言給ふ。いとこそ
この事ハやなぞのめくすぞむくぬくさきちる
花のもり来たるしげ。地ゆかし給ひとふるさましあそ
あられど。ぱまめしうぞどありとハいまれかひし
かういなりけり。げまめやすき程の用ことなりを
まとこ給。ちゞの大殿よやうでと来りかへれど。天
道おまうさ抱しかてぞあるこまいらをかへとおれ
だおとでの法いでゐのうこにいりかへりぞあらひそ
雨面しかへりおりがくうきこがけるる法ゐらる。

いとうやをおとろへて。法ひげるどもとう法ゐろひ
給ひしが。ぞぎとりておやのけうよるもげまやつれ
給へり。なり給ふりいと思ひがこれば。おまうる
まおさまりしず。そぶれおつる泪こそしたるをれ
とせへだ。をめてぞりてうしし給。おとぞもぞうまれ
て法中こうく抱しかひしをとこ給ふよ。ゐぬでふりま
ふりおちて。えとてめ給ずぞ。つきをぬ法とでも。ぬさ
こうかたし給。一条のこやままうでこりつるありさ海
などきうし給。いとぞ志くまゐ面ゐとこゆるまで。行
のさばくことなるぞ。ぬしこそ。ふぞうがこひ。
かの柳乃めまぞとありつるを。ぞいかへるを。なりり

さぬほやけびと。女屋などの年ふるめきあるど
もさへ。思ひなしひきそゆるまして人にはいはれ
遊などのありがとにぞまろおぼし出てなん。志の
を思ひけるおそれ柏の誓のといふことらさぬか
ぐるまつけてもいはぬ人なし。源六条院にはし
まして表とおぼし出ること。月日にそへてお
ぼりこの蓋人志をはいはれひとのはいぶくこと
ゝなしのみどん人のおもひよりぬことなれば
ひなし。秋つくまなれどその蓋ハまゐざ
まなど

源氏四十九才 蓋ハ二才 拾遺
右権大納言のおもひなくうをのぞかしかなし
さぬおぼ口おしきことはよ。志のびのふ人おほ
り。源六条院にも。大かたにつけてこまごまふめやを
きんのなくなるをばおしこ給はんまゝ志くこれ
を朝夕に志こ志くと思ひなれつゝ人なるも法ん
とぞおぼしたりしかばいかゞやおぼし出ること
とはおぼしながら。おもれはおほくおりくまつを
て思びのふ。拾遺 柏ノ周忌 はてにも。論語などとりつきせき
を給ふ。うづもしらざがかはいはけなき法を横
をこのふ。蓋ノ公ぎ人 さすがにいとじく表なれば法ん
ちにまゐこんざしのてこがし百夜をなんべちにせ

うゝハ奴ましことぞと。法ミえぬべく相はさるれ
ぞ。法あ丁ぞりへぞそぞこいとこよるうまぞ
をく。うとしうハあらぬ程よ。かてなしきこそて
ぞおもしけり。蓋いかぞ。ぞいかのとれりとに程こまへり
けり。おきてもひ出のひて。法(源)袖をひきまつハれな
ま給さ雨いとうけしぞ。志ろきうすをれよ。かしこ
もんの紅梅の法ぞのすそいとあるぐ志どきなげ
まひきやられて。法勇をいとあらハなて。う志ろの很
まきなしのへらさ雨ハ。きいのことあれどいとらう
さげよ志ろくそびやかに。柳をかづりて法ろうさ
らんやうなりぞ志らハ雨ましてこゝとさしらふい

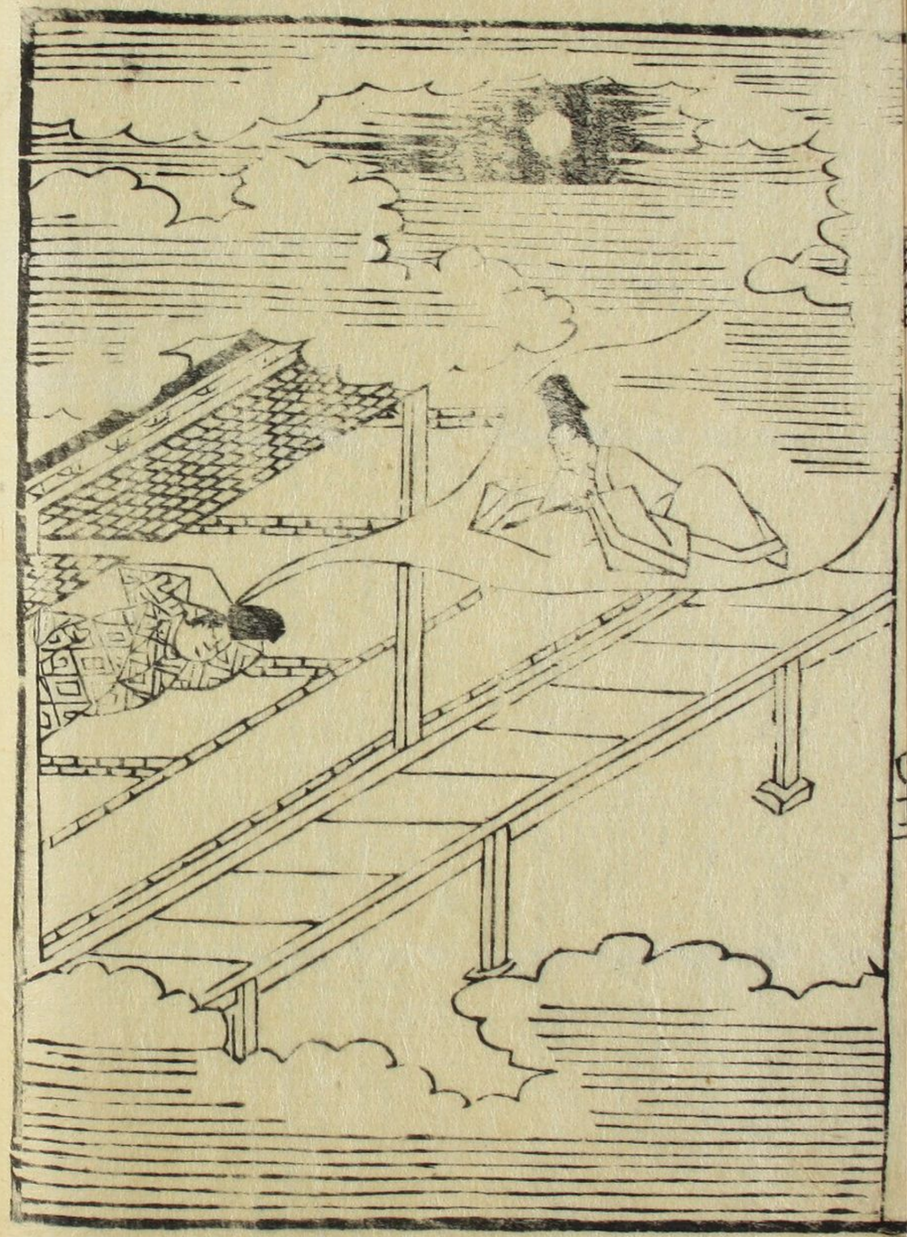
ろぞりさらんぬちして。ぞちつきうけしうまなひ。
まミのびらうふ。もづらうほりくるなどハ。お
をいと(柏よ似たるとも)よくやひ出らるれど。ぞ何をいとうやうよ。
きはをなれさるきよりらハなりしものの後。いろで
くらん。女三やまもまなすらず今よりけこうくもの
ものしうざ雨ことに思へなへらしきなどハ。(源)我法
がぞんのかけまもぞぎなるらずみなされなふ。
まづふあゆミなどしのふほどなり。これこうう
なのらいしよ。何とも志らず立てりて。いとあを
こしうとりちらして。ぞひかなくりなどしのへ
ぞ。(源付)おなからうがりしや。いとふびんなりぞれとりく

をゝらひものゝ如んとぐめのゝ如ふと。ものいひさがちゝさ
女房もしそいひちゝをとてワらひのゝふ。蓋を
きのひて。この蓋れまつこのいと氣をあらかれ。ちい
さ紀ほどのちご紙。おまくこゝ。ひがすやあらん。ぐぞ
ゆの程ぐ。こていたをちゝさ抱とのこゝ見しを。蓋くまゝ
いとをさえひとちゝこそワづらはれ。女房もの
しのふめるあらりゝ。ぐ。蓋人あいおて。ぐぐるし
きこと。ぐがこめまもしまゝんし。衰そのをのく
のあひも来まで。ハこもたてんとすんやハ花
れさりもありちゝめどゝ。うちまりゝ雲のゝのふ。
こそゆゝ志きはとよりと。ぐ。ぐ。ぐ。蓋はの

あひ出るふ。らひあそんとて。ぐめうち紙はと
よぎりもちて。しぐらもよくとらひぬくしゝ
ぞ。深行いと稀ぢけるゝ。このこゝれとて
深うきゝしもつまれずちぐられ行のこ
もすてぐらきもれのぞありけるとぬてもあ
ちて。のくまひられど。蓋地うちつらひて。ちゝゆと
もいひくらず。いとそぐくしうぞひありきも
ぎ給。月日よそへて。此蓋のうけしうゆく
しきまで。あひまさりゝぬまゝふゝ。ぬことゝ
このうきゝし。これ深行あほしますまぬべし

をうちふきあひつゝいつふゝ結もちぐめあふ
ん。はことくもたゞ。しらべかたらずおそびあふんう
しぞ。えもさぞこゝろも。松翠は上ぞ。ぞうしなど也ひ
やりてかしあへりゆうなれだ。ゑ(二)(柏)のぞ。ぞおほうさ
のんぞへやんどとなくもてなしきこゝなるゝ。い
とふうきはしきなりきんとぞれよつけて
といといぶうしうおほ也。ミをとりきんことこそ。
いとくおしかるべかれ。たゞこの世よつけても。かぎり
なくきくことはゞなしずさぞおろうしなど也ふ
まちづ(タノとやね)は中のうちはしきだこゝろ也ひやりもな
くそ。むつびそゆくる年月の程をかぞふるに

あもれよいとううをしこちてをどうなるひ結
へるもことはりまゝ。えしかひかう。(地)むこし。稲へあへる
夏まぞれ。(柏)米つかぞ。ぞおりしさ海のうちきまで
ぐこまてぐこまこまゝあてぞれふえをとりてみ
ゐ。(夕)夏のうちまもなる。(柏)人のまづらうしぞの
ま也をとづひてきこゝろやゝ也ふよ
(柏)笛竹のふきこゝる風のことなるゝが来れよ
なぐきゝ稲まつてへなん。(柏)ぞふ(行)うことに結りき
といふをとゝ(夕)ともんと也ふ程よぞ。ゑ(二)の口をび
まさくぞきゝあふ法ゆゑよさめあひぬ



らひ。ぱ。しまだしおほめりしくそ。しう人のうしこせ
まろだろうれ。氣。ぬ。ぬ。ぬ。のつゐでまろもつ
出りんとこゝぴかくとえ思ひ出ぞとあんさてい
ましぴかまぷれ夏ハ思ひあとをてあんゆのめ
べき。おるうしぎとぷ。屋の法しへよいふこ
とあらとのくまひて。おさく法いしへもあ
きれだ。うちいでさこてげるを。いつまおかす
まうと。法くましくおほしけるとぞ

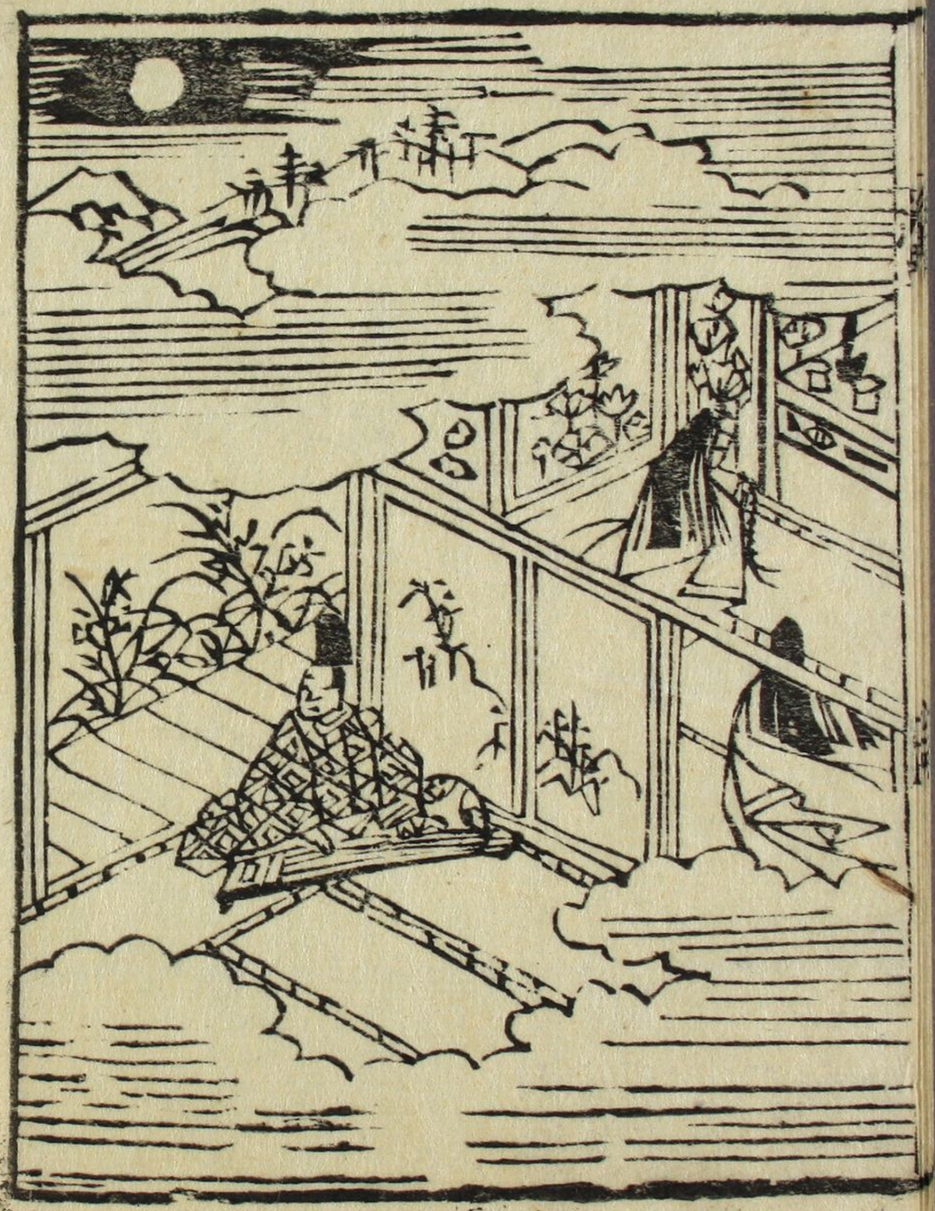
夜ころ。たちまちその花乃ちりは。入道の姫。笑ハ
指伝ども。わらりいでゐる。供養ぞさせ給。ふたこ
びハ。とぐの君れ法んぎしまて。法念誦ぶう。ぬぐと
を。こ夜うまとのへさをゐる。やがて。しつらひを
給。たくのさ夜ぬるどちつりしんとあるうられ
をえらひぬりをゐへり。むしろきれの上ぞいそぎせ
さを給ける。花づくみのおほひあるどれおりしき。
めぞ見もあつりしう。きこうしあるにほひそめつを
られるんだへ。めるれぬさ夜ちりとるの三丁れ
うくびらをよおりてあるがうおげてうしろのまま。
法花の男服。ぬけなりて。しろまものまみが

然にぞうくとしく花の文をとくのへてはれり。
花香はかゝれ百ぶのくれんうをさきまへり。おこ
ぐ仏げうじの菩薩をのくびやくぶんしてつく
つまはりたる。こゝ夜うまうけうしぎなり。おうの奥へ。
きのさきやうにちいさくて。おをきしろき。此系の
そちまぶくのへて。ぶえうのほうを合たり花香ごこ
ちをうしほろぎて。ぶさまほりたる。ひとつかりし
ま白ひあひて。いとちつし。經は六道の荒山と此ぬ
めよ。高ぶうきてこづらしれ。法ち經は院ぞ法もぶら
うせ給けるこれをぶまひ世れ諸弱まてぶこゝに花
びきうりしまべきんを。聚文は法くしをまへりさてハ

阿弥陀經。うしのうえはまろらて。朝夕の法でなら
しまいりぐとてぶんやの人をめして。經に作る事
まひてぶとまさきよりますりをまへるにこの虫
の法ほひより。法ぶとゝめて。いそぶりをまへるひ
ありてぶしをまへ。ぶめをうやきまどひまふ。
きうけうろうひ。此をぢうろまず。すこうさのうへは
うやくさ夜などを。いとあんめづらゝまりける。
ぢくへうし。箱のさ夜などぶへはざらまりうゝ。れ
いとにぢんのきそくれ法く思ますへて。仏の法な
なぐちやうぐんのよにうざらしれまへり。ぶううざり
そて。海師まうのぼりぶざやううれへごまいり

のやぶりは。備なくとおもはせとそぶちちさのぬ
たちすぎ氣をおもはじうそうをちぎりをさ
て爾のうりくれふぞうなしきと此所よさしぬ
らしてぶう深なる此扇よりきつけのへりやや
へぶそなく蓮のやどぶちぎりてもさるんがん
ぬやまじとすくんこうさのへれぶりひなく
もおもはしらぶすうちとぶちつくひるがぶ
長と地をおもはしらぬ此も又なりまいめこ
こうちなどもいとおまこと来りのへりぶうこぐよ
なぶれもくといとなこ出のへるぶ此はうもちれお
もさ海んことにぶうちをきまでこも七條の法

脱などすべて大事のことにはこれ此事の上を
させのへりあやれかそひなてげさのめひなまで。
こしは人はよふなるべくなるずとめぐたりと
やぶつりこ海なること此れぶうじのいと
あうとくぶとのんをやしてぶ世にもぐれのへる
ちりをいとひとなれのてなぶきよくよこも
まじきれちぎりと法花経よむまび給ぶう
とくふうきさ海をあくりしてぶでこの世り
ざえもまぐれゆぐさけきさきくをいとぐんを
ていひつぐをさるぶいとこうとそれぐみな人ぐ
志はされ給



なまなだりかまきまの間どまもおらずながら。
今はのどやかまおもしますぶまいりなることも
おさくなさ絵。間いなさことにおぼしおまりてお
ごろうさをのへるうくしけなしとそまはなる
やうなれど。まいり給りんと寸
源 間かげはおなじ雲井まゐらはながら口が宿
うらの杖ぞうたれる。地 源 なることなりめれど。こで
むかしいまれ。法 冷 おりさ海のおぼしつぎをられける
まくなめり。法 冷 侍まさうびきのてるくいとよ
なし。人ごの法車。源 手のまくまひきなをし。法 ご
前 のへごちこそて。志げかなりつる法おそびま

されて。出てまひぬ。源 院の法車ま。蛍 こなり。夕 ぬ
指手連 た弟 番。藤宰相なるが。おりしまろ限みなまり給
なをしまてうろうなる法よそ八がもなれば。源 志こが
さまだうりなりらもへて。ほやさしおがり。ふけぬ
なそら面白さに。ひきさんで笛なをひざとなく
ふをのひなどして。悪びたる法まいりぬさ海なり。
うなしかるべきおりしハ和をくよくけさぎ
志さ代ひ。そがこゝに法らんぞられ給。まこいま
しへのて人ざ海まおぼしかへりて。こゝひたうなゞ
志さやうよ。ふとうくまいりたまへれだ。いてこうお
どろさ給ふて。びゆかし給。冷 ねびとて 地 のひまへ